

「アメリカンフットボール」

2018年05月29日

アメカンフットボールの試合で、日大の選手が関学の選手に悪質な反則を犯し、怪我を負わせた事件が連日、報道されている。テレビで、反則タックルシーンがくり返し放映されている。ボールと関係のない所でタックルがなされ、あり得ない反則だそうだが、ルールを知らない人でも、奇妙に見える。加害選手が顔と名前を出して記者会見をして、謝罪し、反則タックルをするに至った経緯を語った。誠意ある謝罪で、反則せざるを得ない状況に追い込まれていった心境は納得できる。彼はアメリカンフットボール界で活躍したい願いを持ち、そのために監督、コーチの指示、命令に従い、自分のなすべきことから外れ、やみくもに突っ込んで行ったのである。その翌日、日大の監督とコーチが会見を開いて謝罪し、説明した。監督は、反則を犯すようなタックルを指示したことはないと言い、コーチは「1プレー目で相手のクォーターバック（QB）を壊せ」と言ったけれども、それは、怪我を負わせろという意味ではなく、試合当初から、それくらいの意気込みで行けということであったと釈明した。日大の学長も会見に応じ、監督、コーチと同見解を表明した。大学側は、加害選手が言葉を聞き違え、自分一人の判断で反則タックルをしたと、選手とは全く異なる釈明をしている。マスコミ、世論は、加害選手の謝罪と経緯の説明が理解できるので、大学側の無責任な対応と教育すべき二十歳の学生を切り捨てたような説明に大きな疑義を申したてている。加害選手は、監督、コーチにやらざるを得ない状況に追い込まれていったが、犯したのは自分であるから責任は自分にあると謝罪し、監督、コーチには一言の不平も言っていない。彼の潔さに、大きな支持が寄せられている。

この事件を聞いて、私はまず、フランキー堺が演じた『私は貝になりたい』という映画を思い出した。徴兵された二等兵が、杭に括られた中国人を銃剣で刺し殺せと上官から命じられ、恐る恐る殺害してしまう。このことが、戦後の戦争責任裁判で取り上げられ、有罪と判決され、絞首刑になるというストーリーであった。この話はフィクションだそうだが、観る者には納得がいった。兵士にとって上官の命令は天皇の命令とされ、従うしかなかった。命令に従ったことで死刑になった訳であるから、本人にとっては不条理この上ない。深海の底の貝になりたいという言葉が身に染みだ。戦時中の日本軍の状況を描き出した映画として、大きな関心を集め、幾度も映画化された。強大な権力で押しつぶし、思考力を奪い、上官（天皇）に従わせることが日本の軍隊であったからである。

加害選手は監督、コーチの命令に従わざるを得ない状況に追い込まれた。しかし、大学側の釈明には、学生に対する愛情や教育機関としての責任感が見られない。見えるのは、大学第二の権力を持つ監督と大学を守ろうとする姿勢である。日本社会の醜い組織防衛と日本人の個を奪うメンタリティーが重なって映し出された事件であった。

森友問題で、経過を記した資料は廃棄したと言っていたが、膨大な資料ができてきた。それには、昭恵夫人の深い関りがあることが記載されていた。加計問題では、安倍首相は加計理事長と何回も会いながら、獣医学部の新設について話し合ったことはなく、知ったのは新設が承認された時であったと言っていた。ところが、2年も前に知っていたと思えることが書かれた資料が出てきた。自衛隊の日報問題も「戦闘」という言葉が書かれていたためか、隠蔽されていたが、出て来た。安倍政権の一強権力を恐れ、官僚たちは公文書を恣意的に破棄、隠蔽、改ざんしたのではないか。改ざんに関わった役人の一人が自死している事実は重い。「個」が抹殺されている状況は、悪質な反則を強要された状況と相似形である。これから脱却しない限り、日本の民主主義は死滅する。